特集◎

私の自治会論

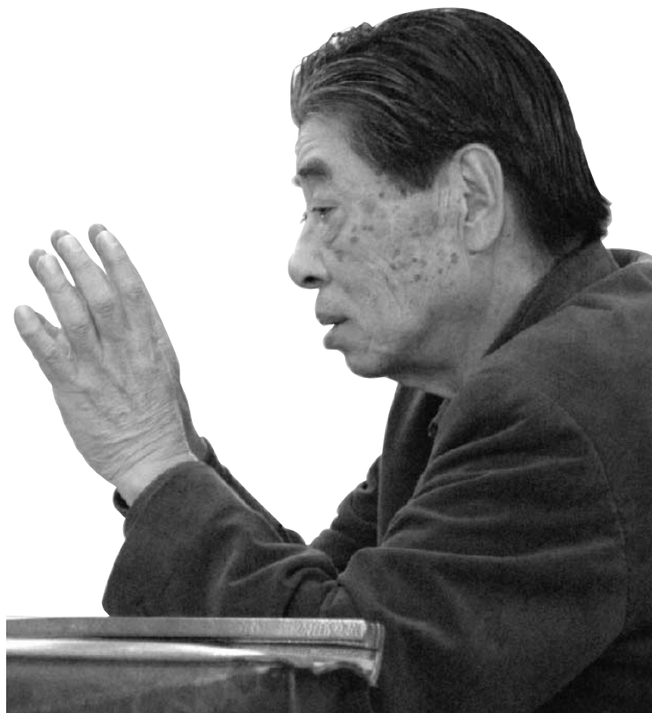
広報紙の新聞折り込み。区への交付金の統一。安曇野市区長会の誕生。今年は、自治会の役割や地域のあり方などについて多くの人がかかわり、考える話題が多い年でした。「公」であり、「私」に最も身近な存在でもある自治会。まずは知ることで、展望を描くことができるはずです。今年最後となる本号は、自治会の現在とこれからを探ります。

※本編では、区・町内会・隣組などの地域住民組織を「自治会」と呼びます。

初代区長会長・河村佳次さんインタビュー

感動でなく、戦いであったはず。

区長会の初代会長に就任した河村佳次さんは、区長としては数少ないIターン者。こちらに移るまでは、自治会とは縁がなかったと話す河村さんが安曇野の地域社会に飛び込み、感じたこととは何でしょうか。



河村 佳次（かわむら よしじ） さん

穂高・豊里区長で安曇野市区長会の初代会長。京都市出身。関西の地方銀行を退職後、平成９年に移住。区長任期６年目。

夢見た晴耕雨読の日

一日でもいいから信州に住民票を移したい――。

そんな思いを抱き、幼いころからあこがれていた信州に移住したのは、ちょうど10年前になります。生まれ故郷である関西で培った人間関係もしがらみもかなぐり捨てての一大決心でした。

退職前は、自治会活動はすべて妻に任せきりでしたが、こちらに移ってからは私が引き受けると決めていました。そして、少し努力が過ぎたかな、と思ったときにはすでに遅く、3年目に分館長、任期を終えると区長のお鉢が回ってきました。最初は断固断っていましたが「つなぎでいいから」と交渉され、「おれは先発完投型。中継ぎは似合わない」と眠っていた反骨精神が突如よみがえり、思わず引き受けてしまいました。

気が付けば、あれから6年。区長として、新旧住民の間に立ち、あらゆるトラブルへの対応、行政と連日にわたって丁々発止（ちょうちょうはっし）のやりとり、祭りや火事場では法被を着て先頭に立つなど、今では夢見た晴耕雨読の日など見る影もありません。

しかし変わりに、都会から移住した「きたりもの」区長に、多くの人がエールを送ってくれます。そして、私自身も案外、この忙しさと緊張感を楽しんでいる向きもあります。考えてみれば、私には晴耕雨読の生活なんて、初めからあるはずもなかったのかも知れません。

今年5月には安曇野市区長会が誕生。転入してわずか10年、河村さんは市内83区の住民の代表となった。「区長は住民自治の矢面にたって、日夜奮闘している。５地域が共有できる価値観を一日でも早く見つけ出したい」と語る。

そして、集落になった

安曇野の美しい自然景観は多くの人を魅了します。現在も観光客が絶えず、私のような都会からの移住者も年々増えています。私自身も移った当時、目に入るものすべて新鮮で、毎日が感動の連続だったのを記憶しています。

しかし、「信州は良いところ」「安曇野の自然を守れ」という賛美だけで良いのだろうかとも思います。

ある時、こちらに移ってきた人が「信州人は案外、この土地に無感動ではないか」と話しているのを聞きました。私は、この言葉に少なからず疑問を持っています。

そもそも、この地を築いた先人たちは、土地にへばりつき、田畑や水を命がけで守ってきました。その結果、現在の肥よくな土地を作り上げ、それが信州独自の集落を形成した原点となりました。それは、毎日が感動、感動というものではなく、戦いであったはずです。その理解なくして「無感動」とは簡単には言ってほしくないと思います。私は、目に見えるものをただ礼賛するのでなく、どうしてそれらが形づくられたかを考えることが大切だと考えます。

安曇野には、今も地域の風土・文化といえる行事や交わりが数多く残っています。この地を作ったのは、そうした人々の交わりと努力が根源にあります。それらは時にわずらわしさ、しがらみ、無駄などといわれますが、これらが適当に絡み合ってこそ、案外な潤滑油となり、人間らしい交流を生み出すのではないでしょうか。私も、今では新しいしがらみがたくさんでき、その窮屈さを肌で感じながらも、それを楽しむ術（すべ）と喜びを知りました。

自治会のメリット、デメリットを論ずる前に、この田舎に住む人たちの素朴で温かいぬくもりの交流があることをぜひ知ってほしいと思います。孤高の生活は都会でもできます。

区長会の主催で12月3日に開かれた防災の講演会。旧・山古志村の職員がその体験談を語った。会場は各区長のほか、一般の聴講者で満員となった。